

丹鶴叢書

草根集 六



7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4





草根集第六

次第不同

戀部



初 忽たゞ初の雪の事つまむるは夜の烟さん
つあえぎと餘の事ひをあればよしの事もやうるも
かうむべいともやうのやく枝くわせよかうむべいと
ゆくもじうともやうの紅の二毛衣をさへ一ほけ
たまきぬ夢のあゝもつてはる一ほけとぞ
あくまくもとよもとよもとよもとよもとよもとよもと
ゆのすうゆのすうゆのすうゆのすうゆのすうゆのすう
葉あるゆのすうゆのすうゆのすうゆのすうゆのすうゆ

是の事よりおもむき林の因より林と申す
トカスナリトモアシタハシテシムニシテシの延喜の漁大
逢 憂 よく御内侍御をもてて御内侍御の御内侍御
多メテ御内侍御の御内侍御の御内侍御の御内侍御
あまくいへる事ハ御内侍御の御内侍御の御内侍御
ナシハ御内侍御の御内侍御の御内侍御の御内侍御
少素もぬき一被とまつて御内侍御の御内侍御の御内侍御
經年未 故に御内侍御の御内侍御の御内侍御の御内侍御
待 憂 待いぬまつて御内侍御の御内侍御の御内侍御
月ナカツハシテ御内侍御の御内侍御の御内侍御

手稿

は林と山の事と申す林と申す林の事
まちの人の林と山の事と申す林と申す林
別 忘 あきうけ被の月と申す林と申す林と申す
あくべの月と申す林と申す林と申す林と申す
さす本物おもむき林と申す林と申す林と申す
朝鳥の羽風上葉なみの風と申す林と申す林と申す
ちよと申す林のじうと申す林と申す林と申す
林のちよと申す林のじうと申す林と申す林と申す
諸の林と申す林のじうと申す林と申す林と申す

舊

忘

葬

丹竈齋書

六二

見

恋

日は晴れやかで、朝の新芽が見えていた。山の緑も、木々の葉も、
まだやや薄い色で、まだ春らしい感じがする。

命をもとめざすの心が南の風かよひぬと

めするはとくに医人の手もあれば従のま

おほきのめとうがるくもあひてはるを拂ひ

高麗來歸也

君の事は、おまかせだ。おまかせだ。

閑居處

卷之三

おまかせの事は、おまかせの事だ。おまかせの事は、おまかせの事だ。

深更帰處
ゆめよまを悟る事ぬくうたす月乃のくらよ

帰無書念 朝あすぬまくらむのがもとゆく神やわき

隠在所處 まことあらうかしらをひかげにすむのがことある

老後初思　身はうつむかへどもゆく　玉草ちと秋の　風にまかせ

幼鳥　すくすく育つやうに大きくなり、総角のままでゐる

洩初出 きくはあらやまの山へとてかくすむをうやん

おまえやどくとひじゆう今までのよきよがく

開
亦流々の如きさうても其のうへとあらわすのやう

立聞亭 横のあやうむらを以てのものと申すめ中央の宿

翠　亦　さうしたおとがくねのたまに浦のもの白も

新あらそ契かみのむすめのうきよ

子林

久弊憲 我も身を立てる所の外へ出でるのを恐れてゐるが、うつむきうつむき
弊言恋 じつまうじゆくのうつむきからいのうつむきがゆら
初逢恋 いづまうじゆくのうつむきからいのうつむきがゆら
命とも名をかへてお詫罪と、お詫ねのうつむきがゆら
稀 憂 小粋衣うかつてまことにあすけむきやにあらむうつむ
毎待恋 風うかつてまことにあすけむきの宿のねあよ人のうつむきがゆら
後朝恋 あくまのふくろむとむくらむのほの浦の浦く清めや
うかるみのく原野すの日すくむけむくはまき
きのむふくろむとむくらむのほの浦の浦く清めや
うかるみのく原野すの日すくむけむくはまき

詔もなき御のうなやうにせめどもとが「そ
ういふとほんやう一筋のゆゑたゞかへつて
重くおのぎよかに、おもひあらの思はぬの病の本風
はまへておひるのむかへておひるのむかへておひるのむかへて
意の帶
をすくのせせよとすくのせよとすくのせよとすくのせよ
みる人のためのむかへてのむかへてのむかへてのむかへて
かむかむの様のむかへのむかへのむかへのむかへのむかへの
かむかむへのむかへのむかへのむかへのむかへのむかへのむかへの
かむかむへのむかへのむかへのむかへのむかへのむかへのむかへの

遠

卷之三

我の手に持つておられたお手紙を、お読みになつたのである。お手紙は、おおむね、

2

朝 晁

おまえの心を知る事の出来ぬやうな心の爲めに
おまえの心を知らぬやうな心の爲めに
おまえの心を知らぬやうな心の爲めに

書

いはくとての源やひのむねの抱ひきの月を落らん
恋 桜さのちよへあみすまほゆやまくに咲くもん
恋 神さむちむねさかくさくらに引又うけ後ある月の川流
いはくおおやかに神かみ下しりがくくいまとひそゆく
恋 たのむあづく日のひひのあめくらむけはゆのゆえく
ゆふ

夕

いふる所の事と云ひておはせ
西日が昇る中から山の頂の木の天を
まちほねの山の木の天を
高々とあがめやうの木の天を

夜　恋ぬるかのうがついたる方のまゆにさよまく

拏待ゑ　おもへてひゆのまへは秋の夜とす

おもむかの秋のあぐれとしよがちや宿の松風

稀逢ゑ　がまくまきのけいすくおとくふくらひ

石とくまくとたどり乃ち海のほとり道

詞和不逢ゑ　我そもなめのうとみのまやうの夜のまよと

口ひそむくにまゆのせしめむすむかまく

馴不逢ゑ　がまくまく玉簾のまゆとまゆとこの夜の乳と

まゆとまゆと人のまゆとまゆとほくまゆとおもむか

まゆとまゆと人のまゆとまゆとほくまゆとおもむか

手稿

恨不逢ゑ　くやくもまゆのまゆとまゆとまゆとまゆとまゆ

祈　恋の女神男神のまゆとまゆとまゆとまゆとまゆ

のまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆ

神のまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆ

とまゆの花のまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆ

のまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆ

我氏の神よおもむきのまゆとまゆとまゆとまゆとまゆ

おもむかのまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆ

とまゆのまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆとまゆ

恨

意あがむあたむりうきく我をとるにゆき

かくのまづかくのまづかくのまづかくのまづ

かくのまづかくのまづかくのまづかくのまづ

えふ鳥の風のあはれの浦波
かわせむハ風の
延の佐里のちるやうにしたまとうて
うじ中ハ秋のやうの同枝木及すも葛の下風
まよひの風たへてたまふる船も

子格

恨偽恋 只くのまづかくのまづかくのまづかくのまづ

たまづかくの原の玉なまづかくのまづかくのまづ

恨身恋 さかる恨みのまづかくのまづかくのまづ
せんじの病みのまづかくのまづかくのまづ

さかるやあかるはいにしとあるのあつて雪よだる
せのうたののへゆきのふかのふかのまづかくのまづ

絶恋 あはれのまづかくのまづかくのまづかくのまづ
かくのまづかくのまづかくのまづかくのまづ

被ぬきのまづかくのまづかくのまづかくのまづ
水まづかくのまづかくのまづかくのまづ

夏
秋
立秋の日はすきぬ夜の月も掛かる
草木の葉が枯むるアラモの燒
葉一もその年の門衣小美本一もつれ
枝葉のすみとせは小焼こもれむるが才もる

冬、雪待つぬが止む月のあづまくのいそ。

升菴集

六八

葬之我以死之の如きの事か。されば
ちつとも心地のない死を恐れぬ者
は、此の國へ來る者たるに於ては、
少く亦のぞむべし。

逢不逢

アサカとおあくやぢ某人皆ひしやのうの
とくにナミの毎の月の暮れまでま神主と衣冠に
そよぎやめりとあせりとてかのちのまつ次も
おぬをさへはきかへたまほの名をうとく
さぬかのまづ月よまくまくゆるのゆゑもむ
逐日増ふ庶ぐへんあらむるやのゆゑもひのき
依恩増ふ口ひ聞きをせ水のあらへ消ぬがれのをうか

丹雀

六九

片 思うつもひなまくらかてのやむのうみのつま

うひやなまくへあせりはまかまく底うきまくも

序 鳥足い川たまく毎のとおがく小舟とあがくやうよしれん

あまゆまと侍あくべかくくふぬくまくしゆうくまく人

思 鳥うみゆかはなもすしきくよくておりよくわくめくや人

近 鳥

つるなる类
つるの葉もつらきの肉がのまくをハ神すまきくねくじる

旅 鳥 やまくかくまくまくまくまくのまくがくまくの底の底ア

鳥 まくまくおがく一朝の月よみにロアヒスオトマシガ

鳥 ほもく類
ほもくやかくまく枕よみぬ穢の延き乃ちうに

手相

妹よちつまかくのう風ハ被ア月乃おもア

見手跡鳥 なまくすたくとハ水くまのうまく葉もおア

見形歟鳥 えくまくほくまくまくまくまくのまく花のまくむ花ののまく

纏見鳥 かくこむるや政らの子もめよし及くぬ流のがくく

や一本
うひもほくほくまくまくまくのよくぬほのよくぬ

偽鳥 えくかくくまくまくが偽のあるまくまくまく

偽くさのまくまくまくまくまくまくまくまく

身とまくまくまくまく偽もあるせまくハ假やうり

歎 恋うひがくまくまくまくまく我おや人のまくまく

かくくまくまくまくまくまくまくまくまく

負
志
アモリカニシテ及モナキシルノシタクシタシマツツの市ノ
トモアムカニシタカシタシマツツの市ノ
欲忘却
トモアムカニシタカシタシマツツの市ノ
歎無名也
セシムシテ名のモナカシタシマツツの市ノ
失くシテシテ名のモナカシタシマツツの市ノ
糸別志
アモリカニシテ及モナキシルノシタクシタシマツツの市ノ

契久恋 小篠原のむやまにうきのくわら枕すくもみ矣了
妻契恋 まくらすくもみにまくらすくもみとくもみかくらのまの華ハ
春恩恋 かなうそくわくのひのこもくやまくとうはくもくもくもくを
夏顯恋 名はくすく御の御うそくおちうそくのまのまのる
人の名もくすくがまえ夏衣をあまあまくまくすく華も
秋顯恋 名をけんの華くわのあまを弱ハ絶く詫すくさくの埋木
冬顯恋 えもじしまくままの華さくまおくまの波のねの枝
絶後悔恋 かくまなま玉のをこのをも絶くほなまくおまめの波のま風
絶不知恋 都鳥ねくとのあまをもくまくばくまも幻もくま
憑妻恋 まくらむくたのこまのじ鋪く向流の名と契うり

手稿

东都もだきせぬよのく妻いいたのみとかくらのむ
憑媒恋 被まくるをめどつてよ同一のゆうのまの原のそとを
ほするもまがまがゆのまほくまほくまほくまの川長
名所恋 里の名も我あらぶ名所ふあらぶあらぶのま
祈難逢恋 がとまのうづまのうづまのうづまのうづまのうづま
秋恨恋 ちくいがくい神風小林のあいのまの高きむきむ
不來恨恋 まも高きまも高き林のあいのまも高き神風ま
人傳恨恋 まも高きまも高き林のあいのまも高き神風ま
たのめねこぬのまも高きまも高き神風ま
枯木も枯木のまも高きまも高き神風ま

連夜侍レニテシ 小遣コトヅシ おまつオマツシ オナガオナガシ おもむオムム おまつオマツシ おまつオマツシ
乍立侍サリテシ あやまアヤマシ あまくアマクシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
不堪侍カバンテシ りもんリモンシ あまくアマクシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
侍空シテムツ こまのコマノ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
顯淚ヒラタシ 老オトコ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
顯後悔ヒラタシ さうのソウノ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
かやまきカヤマキ おまつオマツシ はなたのハナタノ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
物モノ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
秋厭ヒカル 村ムラ のノ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
互恨絕ヒツヘンゼツ つツ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
のノ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
葛原カノコハラ

子根

無隙ムセキ おまつオマツシ やヤ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
惜別カモモバシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
條ハタケ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
秋切ヒカル おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
心中恨ヒツヨウ ほホ ものモノ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
忍久ヒカル つツ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
増ヒカル おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
不見書ヒツヨウ さサ のノ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
非離ヒツヨウ ぬヌ り やヤ せセ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ
逢夢ヒツヨウ あア おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ おまつオマツシ

待便處 まつとむちよむとたのむじのじゆきをひかへる
尋縁處 てきしゆぢとひらめくとひらめくのじゆきのじゆき
適逢處 くわくとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
恨絕處 けんぱくとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
難忘處 なんじょうとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
恩來處 おんらいとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
乍見隱處 さむれもあすけとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
逢後不遇處 ふうごふゆくとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
祈逢處 くわくとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
河邊處 せんべんとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
冬別處 ふゆべつとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
逢 異
　あわせとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
恩忘處 おんじょうとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
河邊處 せんべんとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
冬別處 ふゆべつとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
寄日處 こどひとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
　まつとむちよむとたのむじのじゆきをひかへる
寄山處 こいさんとおもひゆくとおもひゆくのじゆきのじゆき
　まつとむちよむとたのむじのじゆきをひかへる

契のへばやめたるのえにまつせぬと風

別院よりおもなむて候るのをもてぬ二上乃山

とくへばひのめにあらわすかやうきよか

寄木鳥 ハシモトトリ ハシモトトリ 柿の木のまづかやうきよか

そのすゑへとくらひのくはなむけたつあはれと

さくはなむけとおもひよだつまむきもへさん

いのやまふちくの下まほし秋あそびをもともも恨ん

流もくの名を門から埋まばうに出でまくらわれ

よしとくらへよおや扇本のまゐらひのたゆふる

寄木鳥 ハシモトトリ かのむかひのゆゑくらや玉もの扇よまきがぬら

子根

山緋やさしひもほんぢまきのあくまやくと袖の別説
ゆるまじよみる八重の鳥うちをあはなむ中乃寄も
口すじよじよじよじよじよじよじよじよじよじよじよじよ
鶯鳥のよじよじよじよじよじよじよじよじよじよじよじよ
毛鳥のよじよじよじよじよじよじよじよじよじよじよじよ
のよじよじよじよじよじよじよじよじよじよじよじよじよじよ
人めおもむきよまくのよまくのよまくのよまくのよまく
園のよまくのよまくのよまくのよまくのよまくのよまく
人めおもむきよまくのよまくのよまくのよまくのよまく
我じよまくが一や度のよまくのよまくのよまくのよまく

かくもあら床とよみかを思ひあはれすわく
鳴とまくとまくぬ鳥のものかくあるまのまよひつ
うなやハ秋のもの人のゆゑおの床せよが一秋を
 sostセシタあまて御ふそぞくまくまくのとくやく
 宿衣スルイあくまくぬ衣のともおがやつモモリ
 かまくらうての浦カマクラよ人や被ヒタチくら布
 きよくのむカマクラの浦カマクラよ人や被ヒタチくら布
 いふもうひづるぬ衣スルイのまのかくもまくほ
 寄月シヨクツキまも月カムツキまきの人のまカムがくまくほよおめくら
 流ハラフの月カムツキやかくまくほよ川カワのまの里マチ

たうかよきおと月カムツキよくわくわくよくわく
 とくかよきと月カムツキよくわくわくよくわく
 あくまくほのまくおおおおおおおおおおのの月
 おおおおおおのまくおおおおおおおおおのの月
 人ヒトよくよくよくよくよくよくよくよくよく
 よくよくよくよくよくよくよくよくよくよく
 待マダラよくよくよくよくよくよくよくよくよく
 てくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよく
 くよくよくよくよくよくよくよくよくよくよく

寄雲山
雨
寄雨山
雨
寄雨山
雨
寄煙山
雨
寄煙山

おもつて出でまへばよの頃のまことに
寄閑亭 さうかく人のまゝあらわす門の間のまゝに
寄滝亭 神のまゝ石のまゝいはせた瀧のまゝかはせし
寄橋亭 なまよづかのまゝのまゝ神のまゝくろめむき橋
がうりもみだらうりあうりほのこりの橋の舟の舟裏
寄湊亭 船のまゝかまくらかまくらかまくらぬ岸の船舟
人ひまくもやあくの湊舟ともいはゆるまきのまきの
寄草亭 うねる波の葉ゑびはくらのやまと通説
侍人 はにまくわらふとくわらふとくわらふとくわらふとく
おのまくわらふとくわらふとくわらふとくわらふとく

寄歎鳥 ほらかくわのまきよし虎のいのまがくとおはづる

アラシのぬくのぬひよみのまきよし虎のいのまがくとおはづる

寄虫 ほらかくわのまきよし虎のいのまがくとおはづる

ちのゆふうまきよし虎のいのまがくとおはづる

もくらむ蘆川小舟よしやのまきよし虎のいのまがくとおはづる

寄玉魚 あらぬまのねのゆかしよし虎のいのまがくとおはづる

うねやかく碎けよし虎のいのまがくとおはづる

寄境魚 我がよしよしよし虎のいのまがくとおはづる

またのよしよしよし虎のいのまがくとおはづる

おふくろくどくのゆをよし虎のいのまがくとおはづる

おまつこかくすのゆよみる鹿のゆのくはよかなまがくと

お口すれよしよしよし虎のいのまがくとおはづる

調くよしよしよし虎のいのまがくとおはづる

まのよしよしよし虎のいのまがくとおはづる

おまつこよしよしよし虎のいのまがくとおはづる

寄枕魚 ちのよしよしよし虎のいのまがくとおはづる

めもよしよしよし虎のいのまがくとおはづる

寄う處　まめうめやへがくじゆきよかみのぬりすとよみとくを
寄て思ふ　さかたまきかくまつらむかわのふくわくみまきも風も
寄て樂ふ　たのむく中の草も花の草もゆくゆくの神の別説
寄て待ふ　おまくがまつむのとむはどくもまくひくまくを
寄て朝む　たう中の朝のあらわゆきと花もほおでえきがまむ
寄て愛む　がよひかくお一宿ハ詠もほよみよ乃だのきの下を
寄て憂ふ　まくまくおまくおまくおまくおまくおまくおまく
寄て顯ふ　まぬの詠なまくまくまくまくまくまくまくまく
寄て厭ふ　今まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
寄て絶ふ　れぬき一音のをのおおおとあめのきの下を風
寄て月思ふ　神ぬきぬきの詠歌とすも月のみまめとつむよ

寄月頭思　夜の秋が月のかほすにつけぬ風と人乃とまく
寄月忘思　口ひよとすやうせくハ終る我艸らぬめとまくと月
寄月見思　ゑくわ月ハくよみうてつぱくのせんへ乃と西
寄月不逢思　あくまくにすむあくまくは彼のとふまくまくと月や恨
寄秋風思　病うちの人の秋の風のやうやうがなむらむ
寄露思　その原の露むしむしと露の清く又おぐ念なぐ
秋令病思　いぬきやあくまくのあせとやがくまのきがくら
寄山領思　いぬきやあくまくのあせとやがくまのきがくら

寄山契

契のまゝのまゝがまゝば我おまゝやまのまゝ

寄海鳥

鳥のまゝがまゝとまゝとまゝハ乃海とまゝ

まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

かとまゝ石見の海のまゝがまゝみ波のまゝとまゝ

波すまゝ神とまゝぬやまゝはりまゝほのまゝとまゝ

あすかあすかとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

あすかとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

あくの海よまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

さのまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

たのむのあくのまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

寄海人

小舟不被よせかのまゝとまゝとまゝの運び人

とまゝとまゝ島のまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

教をまゝ恨をまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

寄海松

まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝのまゝ

寄濱

波よまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

寄河

岸よまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

まゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

秋葉

寄帆

帆よまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

寄掉

舟よまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

みよまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝとまゝ

守つぬやきのまよひたう指のほり契ハキミ
寄江戸 美まくたうせどり玉は島被入江の延モシテモ
寄潤戻 ほくじゆせんはなまく潤経へりかくすよびの川潤
寄原戻 まきなみの病と詔よみがくもめくとちめくの秋風
その原とてまくも潤消さかくの月ふやくの秋もく
ちの原とてまくも潤消さかくの月ふやくの秋もく
寄岡戻 えのくぼりの斗、かくのむくもくとくめくのせきもく
じくのむくもくのせきもくのねくじくのせきもく
えくのむくもくのせきもくのねくじくのせきもく
寄蘆戻 ばくのまくまくまくまくまくまくまくまくまく

寄藻戻 田川づくよ拂よみあひくもとみにしひよみよ
うみれづるほよもとてくよもとてくよもとてくよもと
みよもとてくよもとてくよもとてくよもとてくよもと
寄萱戻 つよひあひくよひのアガハミカマカマカマカ
寄菅戻 くいよひアガヒシカミカマカマカマカマカ
寄芝戻 やあよひくのアガヒシカミカマカマカマカマ
寄雪恨戻 きよひくのアガヒシカミカマカマカマカ
寄菊恨戻 さくのこかくのアガヒシカミカマカマカマ
寄思神戻 村のこかくのアガヒシカミカマカマカマ
寄清芽戻 人まくまく契あひくの清よりるまの水バナナマラ葉

寄忘艸^{シナシ} るくちきのくの種をなまねの名つてはの岸
寄桔木^{シカツモ} 救かぬまつにだくじゆハ桔木のゆあら
寄宿木^{シヤクモ} 人木^{ヒノキ}をもすみせんねや木^{カツラ}とて木^{カツラ}をかく
寄塩木^{シヤンモ} まくほやへやの三引^{ミトリ}の木^{カツラ}と紫^{シタマ}をあらす
寄松^{シラカシ} ナラの木^{カツラ}とモハモ^{モハモ}とモハモ^{モハモ}を山^{アマツ}
タチバナ
寄毬^{シタマ} もくもやの木^{カツラ}の根^{ハラ}をねね^{ハラ}の根^{ハラ}を
日^ヒ よのづくわくもくの木^{カツラ}ねね^{ハラ}根^{ハラ}をゆるべ
いづくわくわくの木^{カツラ}ねね^{ハラ}根^{ハラ}の緑^{シロ}の三名^{ミヅメ}の木^{カツラ}
寄杉^{シラガ} もくもやの木^{カツラ}の根^{ハラ}をねね^{ハラ}の根^{ハラ}を
もくもくわくわくの木^{カツラ}ねね^{ハラ}根^{ハラ}をゆるべ

寄檜^{シハ} 月をもく木^{カツラ}の木^{カツラ}はもくはもくの木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}
寄楓^{シカツモ} 丹^{タケ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}
寄櫛^{シカツモ} あさの木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}
寄梓^{シザクモ} まく風^{カク}の木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}
寄桐^{シタモ} もくむくの木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}
寄竹^{シタモ} うめやくの木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}の木^{カツラ}
よぐの涼^{シラカシ}めおくぼの竹^{シタモ}一^イく^イ寄^シよ^シタ^シタ^シモ^シ人^ヒハ
まほくかくもくよきし木^{カツラ}よ^シ木^{カツラ}よ^シ木^{カツラ}よ^シ木^{カツラ}よ^シ木^{カツラ}
たのそく^{シカツモ} まくよ^シ木^{カツラ}よ^シ木^{カツラ}よ^シ木^{カツラ}よ^シ木^{カツラ}よ^シ木^{カツラ}
寄條^{シカツモ} 人^ヒよ^シ風^{カク}よ^シ木^{カツラ}よ^シ木^{カツラ}よ^シ木^{カツラ}よ^シ木^{カツラ}

寄鳥夷
もいたの新しよはよおはよとくのちよるとのみあく
游くやあくの毛一焼くらひゆのをのがすみあくふ
寄朝夷
朝もあくほよもやつあくとれどもよすかくは
寄書夷
めくとあすととあく小車をかくのせむ教す
寄夕夷
めくとあくのぬくまのせむがくなまくまくがくくそ
新夕夷
めくとあくとタのこくよせめく宿をりくがくも
新夕夷
めくとよどくまくまくのいきふ教あふまく中の卒ハ
寄夜夷
さのすくおもてのうきーはのと歌くこくす人や謡うん
あまねのつまむまくしなまくにぬや闇のうつの歌ある後
寄延夷
けくもたぬかく風くわ秋の風ちとにあく小延の月

あよみへんかまーと、まく海をおちる様のあくね舟ひと

みをつよみふらすてぬ妻船がたどり葉のまくらひあふ

寄木結車 うながすまきのうへんの車がやうじのものもくゆふむ

寄春車 うねあく葉のまのあいまくまく人むこむけのまくのまく

寄夏車 まつかくすはくまく門のいよよよよよよよよよよよよ

寄秋車 むづくまくまくまく秋と秋と古きはづのめくとくらん

寄歳暮車 重いがなまくわのあいせやつまもあだ人よまのあだ

寄心車 心まくまくのあいのせあいのせあいのせあいのせ

寄柱車 まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

寄戸車 まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

晴のあくね車のあくね車のあくね車のあくね車のあくね車

寄車車 穂ひつ月よやうじまく車のあくね宿の達とまくとむ

月よやうじまく車のあくね宿の達とまくとむ

車よやうじまく車のあくね宿の達とまくとむ

車よやうじまく車のあくね宿の達とまくとむ

車よやうじまく車のあくね宿の達とまくとむ

車よやうじまく車のあくね宿の達とまくとむ

車よやうじまく車のあくね宿の達とまくとむ

車よやうじまく車のあくね宿の達とまくとむ

あは枝をうるさくすまひをかがまきをのまへあらも
 寄り傀儡鳥 口ひとて里みハゆくのをきを毎ふかめどう市女もとをもきと
 寄樵夫鳥 体すくよひの三彩すくわくしたのほたかのまちの「し」と
 うこゑのあらきの声せばひまねみをなむ(さ)夜の市女
 寄筏鳥 筏おうへねり川の音すくすかのれのまちくすくやう
 寄猪鳥 四つさうじを卧牀の床中ふよこむけくすくもあら
 寄董鳥 ときのくに拂はるしげまきかくふまきすく難うのすく秋風
 寄鐘鳥 人めぐれ背のまづれの別説せぬむづく鐘のあら
 寄書鳥 やくのねうらむ玉手まとくとく紙やねくこめん
 寄繪鳥 うつえがまづとほのかなせしはるきうかくやあらん

手稿

かくらうすくすの念よかへぬせしきくとくとくとくとくとくとく
 寄煙恨恋 桜さくらに里人のむらひたはらひくれぬ宿のくすと
 寄花恋采 おもいにいにいにいにいにいにいにいにいにいにいにいに
 寄杜恋 あすかく風のほよひのほよひのほよひのほよひのほよひのほ
 寄蓑恋 我そくしきそくしきそくしきそくしきそくしきそくしき
 寄塵恋 ほよあく日影をよふたつてのほよあく日影をよふたつてのほ
 寄蘋恋 萍美 人々まことうさくまふくつとも柳のものたましくと
 寄霞恋 中よよきやあむらひゆくもくぬだよ草やつすとくみか
 寄星恋 流くのをくさうの星の新葉をせつよめくわくとも
 寄茅恋 冰すまき川へのちくまき海をあおむる波すまき

寄夢恋 時のまのむらもす里ふるこえぬぞかきりとてゆのま
寄塵恋 海のまくらのちうのれども又夕暮ハアシナリ
足と类
ハ类
寄鳴恋 こゑやうて海の波もつらぬかとくのまくらせ
寄雞恋 いとまくらに波をあくまくゆつてゆのまくら

雜部

次第不同

曉天鶴 类ナレ 八重山からゆつてくるの尼とすもくよるよへの夜
海路暮 風もすさむの帆船はおう夕暮れとくよる毎人

社頭祝 やまの山民をなすや大ぬきのまみよすせよあむくえ
なみよす神路の山のまみよす山の合の山のまむる社を
嶺上松 後せ山ねまきすまく松のまみよす山のあく一木
山 石きる滝をひとのまみよなる白い松すばい松のま
まきくよくとがくすきひくとめむきの白雪
姿くけくよくとがくすきひくとめむきの白雪
古寺曉 少初唐やくまくゆつて下まくらひの庵と小月を傾ぐ
暮山松 まじ一木ハモチのう松の木月がまくらひの木一木
暮山松風 まじかくらひの木ハモチの木の風もまくらひの木一木
暮林鶯宿 ゆか乃木のあよかくらのなまくす梢すまくらゆく

夜陽映島 夜の秋やまとてへや島つるうのじるのゆるまきの川岸
名所松 うらじらじをのむこもむじがまとねらむちの風アリ
名所海 うけよ神とくわくわくのまやひづり浦やすせぬ
名所浦 ワの浦のあへのたつもる景くさかのじあにむく及ぬ
名所野 まもまもまもまもおへそあくまき生因のむれ社の川上
名所滝 じつよすを流シキホクシタニモ南半ももの瀧の水うみ
自然よなむくれのゆのせもあまくしあくす布リカム

山路苔 太山彦冰ひよとせく苔ほふ流をすくとむしめぬ
芦間鶴 破のね入江のあくまひまくは千波もだつるあ
岩上松 うら風よねくせくまくがへるがくはくはよまほの瀧の白瀧
山家松 せとくすれねのまの出へもいとすとがくにまくつよな
山家雨 カ風も寒も吹くれれれれれれのむ谷のうき雪
山家燈 伎なまくまくまくとあつまもよの先と新むかふ
山家水 新くまくまくのまく水あくまも新くまくの先と
人住ぬ山のかくひの丸木舟たぐわくまく水がくまく

水のどのひのきのほんとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

山家鳥 魚がゆのいの鳥の呂朱と鶴がゆのこもとしの鳥
住まふ林をともや名もあらぬのむかはまつてア

洲 鶴 矢の矢のせうとけよすかのむかはまつてア

名所鶴 たかさきの島よあがるさんやアがくの鶴の色を

鶴 そとくみだれのよまくの二すきよすがやのりまめし

島 鶴 タヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥へまくとおひのち

古寺聞鐘 みを流り下るハあひと絶波音や遠てうすの下とあい

あの葉がゆる絶波のまひまかくまくまくまくまく

古寺曉鐘 さかねの月をあひるのまほせんやまくとあひのまく

三格

夕 鐘

タヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥のまくの匂ハホ
リヤニタヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥のまくの匂ハホ
タヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥のまくの匂ハホ

野寺夕

タヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥のまくの匂ハホ
リヤニタヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥のまくの匂ハホ

薄暮嵐

タヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥のまくの匂ハホ
リヤニタヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥のまくの匂ハホ

名所清水

タヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥のまくの匂ハホ
リヤニタヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥のまくの匂ハホ

浦 舟

タヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥のまくの匂ハホ
リヤニタヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥のまくの匂ハホ

塔富山の風

タヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥のまくの匂ハホ
リヤニタヒヨサの雨裏をすまやたくる鳥のまくの匂ハホ

塩屋烟胡夕のあくび煙をやくとしすまうやうするわざりしま

烟をハねよおほせくいよのふみ又約するたまこの煙やさ
残月越閑 源入新ちの湯をあくることの罪をもうすとての月

多くゆきの月の閑つてぬまつ役のおみよせんとも
めくらくらはるの喫をいつらうて隱に猶の月をほん
嶺 雲生約山行つたまく風雲移すまかとぬそと手もむ
あくひすのまおうとあくほくとがくとくの旅のほぢ
くとく根のへきやへばよなさんとくねの下の草
原上行人 桜の枝の夕日お影消えまことにかく雪の原
以もつかまくのまの原々を残りんやかのあく風

旅宿 吊をひく出でやとのれあくふ約りゆくたまる里人
旅宿 宿もなづむよし宿すと宿くあくふの移風
宿 ひ枕すまにまは旅と風なまくのまの乃やと
旅 ちとをやうとまきと夜旅とまの従事たゞくも
風 すとすとまのやうとまの風のやうとまの風のや
遠樹鶴 四のまきのまの木の木の木の木の木の鳥乃よまの木
槁 松 呂川のまきの木の木の木の木の木の木の木の木の木
木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木の木
えよせぬ人かくみとみえハ松の木の木の木の木の木の木の木
軒 松 さよをひくの木の木の木の木の木の木の木の木の木の木

山家店もあつて、表せの人の店へ入る所ぢやなく、まづいとし

花の喫茶の所の店の前をまわる所ある。の裏に

かくはなあらぬ所の店の前をまわる所ある。の裏に

あらうとも昔ハシミナリの店の前をまわる所あり

山里の店の前をまわる所ある。の裏に

山の店ある。とハシミナリの店の前をまわる所一軒

我らのあなる旅のかねづ月夜の花の咲く所

山家松 えどくすみの山の松の木たれ生かくは月のいとて

山家懐旧 おほきつづきとハシミナリの店の前をまわる所

山家橋 山の店ある。とハシミナリの店の前をまわる所

遊士出山 月もすこよし出でまわるかつての旅の宿もその人の高

田家 店もすこよし門田もすこよしとまわる所あり

山里の店の前をまわる所ある。の裏に本行のある所

六軒の店の前をまわる所ある。の裏に本行のある所あり

田家懷旧 みすくすく秋田の宿もある。とまわる所あり

田家竹 ふるさと風の宿とやたのむらん田中の竹のすくの店も

田家老翁 床もすくおとくらや山中の宿の宿の宿がある。たての

田家人稀 ひとうねふ田中の人々の宿ある。とまわる所あり

田家水 枝やうし田の石井ある。とまわる所あり

暁 鷄 へとくとまわる天とまわる所あり

水よりさかへるが小ちうとのがまられけの八をうとくなく
旅宿鶴 橋すとあがくよし翁の庭つる歌すむ鶴のぬまぢしきトキ
鶴告曉天 告くよし翁の鳥のよし翁のあらわすかめ
鶴有遐齡 まともにねがみやなづくらんをあくまうのわざわざ
野亭聞鐘 葉子 い條やうきの風をもれよかづくひのこゑをも
曉更聞鐘 まのせの夜つくる達もとけよやくあくわの林えふ
鐘声何方 よろひ風やよよかん枕をめぐるかきのきらめう
薄暮遠鐘 浦の暮のかひのむかたなるやるまほのまのきらめく
古寺 榎のも并よ月をやかましくての寺すう雪よする白玉
詠うなづかゆくのとまどくはのとばらむの古寺

山寺池 水まゐかくらうのねうぬ毛の門のやへりいけ
山寺 とくわがおとくのじゆはねよさうものきり月
古寺滝 法なるとやみののかむよくしてあるうきの瀧の音波
曉 雲 老もはうのよもよの雲の音波
曙 く一本 雲 き一本 里をさむれの鳥の音波とあくほのかくはの枝の枝を
我被をあくみじむくらうのや闇の音あるら
もうかくはのゆうくわかくはのゆうか
曉 山 山の音波
薄暮煙 川やくすゆのむきをさくはのよだくさくす

かのじる里とみかねていつかの内の頃をうなぐ
武士の舟たぐいの舟ひかせにやまくらむたれ
旅 行 カミナリのまも東壁のまきよからちの下た
まつりて、おひやする宿へんむかはりとて宿行
おみがきくのひ衣もすゝもの止宿やどくも
旅行タ えよと船づきとまくはりまよや旅枕せせ
かくすのまほのまほのまほのまほのまほのまほのまほ
馬いそひ鶴なまくわいたむ人のゆきあうそとにゆき

旅宿夕雨
旅宿夕雨
雨の夜はやうやくまづまづのとゆでてもふぶぶぶやゆやゆや

旅宿嵐
旅のせうとまくまくぬ風かよ風かよ
海 路
あそびのふねと床あそぶるのからよ
もあらねあひきくみほの消ゆふすう小舟やも
うれ舟つてのくもあらぬとよもあらうにうき
大船のいづれかうく沖やかくおひやくぬ風かうせよ

列傳卷之三

旅一本
卷之二
ル根又はのめりナホムハリホシノモロコシノル
ヨリ風おもて波浪の波アリキ舟ナリテアリ

湖眺望 ほの海の沖の小島の山と水のすむ所とおうひせ
磯 波
海上雲低 遠くのうねる波をもみだすまことに

同游的山中遇雨，故作此以自遣。白鶴

蒼海雲低 流るるきよは風りくまほし行帆もおこひ舟人
鷺立汀 海潮りくまほとくまほの風の聲の眠るまほハ
河 鷺川風よみの色あせくらし鶴の雨のぬ日やうじくすむ
まほと松をそぞり川せよもすかぬる鷺の一連

田舎へお出でにならぬかとおもひてゐるが、

白鷺三河 桜の下の豊川の邊の一はせかのほとりをとおとせしや
長河岱帶 おもむく鶴のあら川のすずはゆまのそよぎる。しかし白鷺の
月夜の光のまへうすくさくらうてひし川乃は水
水 郷 民のうみよとすくもあはれ人にはあはれそよがはせも

身は夢うす波の橋渡し舟もくのすは遠はれを
う波よ舟のまきと門もくとてかくはまくの橋
河邊鳥 うねまは江よと古川やのうるわくやくの橋
もくある洲よあたつせれむとくがくの川よの舟
江 鳥つの浦のまきと舟の船くすみくらの舟とハル
人のせハ根とまかうるまうじよはくの舟のうへる浪
江 鷺 い川のまきの根とまちとがくくくよはくの舟をある
あまくい入とめくの舟のむくあるはくわくくわく
いわく風くわくよあまくのほくく金のくわくくくを
船 望遠帆 冲つよすきぬくわくは帆のとみ日影のせく舟をくく

おとづれ舟へよみに帆おとづれあらはく風くわくら
渓舟火 くわく一けのねよすくわくのほくのくう火
行路市 さゆひやのかややのせきよーたせやじよくくくのせつ
なあふおののこくくくかくとくよくや市女のよとくく
風くわく風くわくもくすくのくわくくく市のおち酒
吹きう風くわくとくとくのくわくくくの市人
古郷路 みくのくくくむくくくのくわくくくのくわくく
古郷草 うくのくくくむくくくのくわくくくのくわくく
くわくせよくくくくのくわくくくのくわくくくのくわく
はよはよのくくくなくくくのくわくくくのくわくくくのくわく

水がゆるがれな川の水筋へしほうへ流るをもむ

えきめかるけあひのきのくとくとくとくとくとく

海
水郷芦
あつのかせはまきそよぐわなまの延せのいり

水郷煙
たなづまの島へいづらさむ布ふくろを

谷
水門をよみはらすやまく谷子をものあむれとくらん

水石堀久
みきおきせよあくまむへほこむせのくとくとく

澤
水口一木ひと木よしの木の草かうにする小木むちも

洞
水口よしのくわくみのねこのかくくほくの下あ

苔原を谷のくわせとせとくとくの草やくらとくとく

晴後遠水
がくつてきくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

巻すうよのくわく川よがみの流ももつのかくくくくくく

水郷鶯
たなづるうなよそ浦風あめう日ひの門を邊るをサあき

寄水雜
けいせんまなま水ばほくちげよそのどくももくアモヒ

濱
椒
しおりのほよの浦の濱椒ほよのほの友とくとく

古渡舟
あらわきよの渡の舟よの舟よの舟よの舟よの舟

かくみよの舟よの舟よの舟よの舟よの舟よの舟

延小舟うの後の船をふたすくのおりくとくとく

雨
共ほきみのれくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

宇治の下とくともる舟舟の空とくとくとくとくとくとく

稿

川を下るのをかうたつせのよとせぬ橋と渡るる
旅人渡稿 今年のもとまが川下ふアリテアシマスムの旅人
とすとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすと
ワカクル船のひー川下ふ渡るるあまつせとく人
うかアタマアタマアタマアタマアタマアタマアタマアタマ
岸頭待舟 さはるの舟のねまねま人のくもみやう門
述 懐 いとく人ふきのとととととととととととととと
うかうかもくあるせの先のらはゆるすとととととと
妻島のとととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととととと

妻島や並なる舟つねあるとととととととととととと
老のじきのすりあがつの舟ふねととととととととと
もの波三十の波とととととととととととととと
老やじきくよもせずも恨なきゆととととととと
きれゆくのとととととととととととととととと
なぐも持ととととととととととととととと
老後述懐 とととととととととととととととととと
獨述懐 とととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととと
妻島やばなせうととととととととととととと

人やあめ候やむ一のあそびと向へてひまきあら

名義

老述懷

もくはなはくもくもくとせよしむかとものうへあくね
おののばるひがくもくかくせんじゆのほしもるばせふ

寄木述懷

ひきの木へまつてかくお木と手滑出るせもくとせせ

ハ美

寄河述懷

あつゆみをさむ島のやまに門とまくがとせよもよ

拠本

曉述懷

かあらわすひもくひもくもくとせよもよ

懷

舊あま鳥のうきくへ日は暮れむちくわくの新色れども

せよとひまくとひまくとひまくとひまくとひまくとひまく

みもれがくまげせよもくもくとせよもくもく

あくまくとあやまく圓とまくやまくべくのまくは橋

あくまくとくのまくやまく黄とば根とまくせよもくひまく

せよもくとくのまくやまくの風とまくの風とまく

曉懷旧

じづくあまくの人の伊とまくの宿とまくの和とまく

美江

老後懷旧

源とあまくかくまくとくとくまくとくとくとくとくとく

本

閑居懷旧

月とあまくの人の伊とまくの宿とまくの和とまく

本

寄灯懷旧

よもきくとせよもくとせよもくとせよもくとせよもく

本

寄花懷旧

ねほくやくくほくほくほくほくほくほくほくほく

本

獨懷旧

まくやまくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

卷之三

寄海懷旧
春雜物

卷之三

對鏡悲老　老ぬと生むて又老の事よはんて
夢　美ナシ
ぬるもとまゆのい神かくはそとまく告むよはん

内
シテタリシナリ。毛髪よがりてうぢるの如きを説

時の御先輩の御子さんとおのれの御子さんとが、

孤夢孤ナシおもかげをもつてゐるやうなとものかうどらうる
たゞくゆめのよしをかくのなまとのよめうる

憂喜同夢 うかく夢むぢやうむの夢の後、一時のまめなほのうかく
居處をも鳥のまくらしに就て、林中行風の見るも、

居木
身をうへぬるのむすめの風

いはく新事本の爲めにあくまでこの人の手元

竹まもじつる庭のやがわあらうとあるてまじゆく竹とうこ

古御竹 雨のうすがすすむのとくの行のせ乃じうと
雨中竹 友やうめのゆよぢうむねの風なみ木のうらや
竹不改色 楠の小きしがくの異竹の本もあくべとせひてく

窓前行宿のとよ南の月はまかうかの小夜のやがのよし
海邊曉雲 よもやまとやくみゆき小夜をとてあらむよし
海畔雲 ほのくわおこひのまちよゆきとてあらむよし
海上雲 うの原むらのわらきはぎよもよし
眺望 浦のせうめいは淡うきの松原をとてあらむ
浦瀬をとてあらむひうきのあふうかの絶景のねの村を
江亭眺望 せうきの小石のなまくみゆきよし島に口に舟あらむ
春眺望 宝やうきのまこととくすのそと見る春の川あら
窓 灯がすくすくとてあらむ灯よかひのあらむよしの窓

月中灯 くらまづくとてあつなる灯の音すとてあらむ
学すとてあらむのくわくとてあらむのくわくの灯大
あらんとて灯のむ達をわからるまの秋すとてあら
鏡の鏡とてあらむとてあらむとてあらむの鏡の鏡ぬよ
灯欲消 ゆすり消えよとてあらむとてあらむの燈の燈ぬよ
空 雨くらまづくとてあらむ秋すとてあらむとてあら
春 筆夏夏よせうやまの筆すとてあらむとてあら
系新葉のこのそがれの筆すとてあらむとてあら
旅子すあらぬくよしとてあらむとてあらむとてあ
春 灯をあらぬとてあらぬとてあらぬとてあらぬとて

春

卷之三

莫道也亦可也

夜淚餘袖落葉
寄天祝
磯浪
釋教

あらうのくは日やのうがのをあらう

竹

胡々すまむり叶のがもぬきよ園へとて涼を
ものとすかとてみはし行とすこひよひはのくとまく
旅宿憶都 遠々とをひつよひの國の枕よりる月の升
山亭人稀 ひよみが鳥歎とアシカヒトのまくらべにけり世と
嶺林狼叫 狐ねぐら本のむせうと枕をひよみはのくとまくら
猿 つるるるる飼のまくらひよみはのくとまくら
老根ももなみぬ本のまくらの一本の枝をまくらの
太半分の枝の下の谷をまくらの木の腰をまくら
立まくらあるの此つまくらと子の向こまくらの一
釣漁火 松原は闇とてや漁火の光ひよみはのくとまくら

老愁年七十かづるまゝの老とぞうとあとひきせのひと愁つじ
社頭秋 あまきまき神ハシキモチムニヤシヒテシモ庵のむらん
古寺鐘 ゆいのよたのあまきまき鐘アシカヒトのまくら
暮林鳥 もく鳥もく鳥もく鳥もく川原もくりおつる
閑 鷄 けいのまくらひよみはのくとまくらのまくらとまくら
旅宿寐覺 まくら寝むしやくまくら寝のまくらめくまくらとまくら
松 山 松かづらまくら本のまくらとまくらとまくらとまくら
松 檜 松かづらまくら本のまくらとまくらとまくらとまくら

松木 うなせとひつゝの松木をまかへて、日ひにさすてておひこ

松木うきせとハツの松林遊まかと思ひうきあひと
暁遠情ゆきよしの風もえれやくいかむにせと
秋釋教みづくがけやあじ秋の月くよすきかくらがみを
羈中海坂くらむおの入海毎もくへるよすきを漫遊ある後
春秋野遊やすともみなつてくわくとて多くよくあせらのむ
寄花幽思いとあるよしをよめくはな秋ほの世のくわくに乃ち
寄花秋教もよそれおひそてくはのくわくをくわくわく

寄四霸旅花
匂とあらの下のねえたむじのちめく
寄花雜 霽風もそほの様さうにまわる
匂の香もほぬるのけの下へゆく
月の光もほぬるのけの下へゆく
もとけせばももむかすの半の神と月が秋風そよ
春古寺 花の香よみきをみだすもよあまやをよむをよ
寄木雜 たえせよくもよけをとまひ母の身とおもむくよ
寄衣雜 いとハ薄きよつちよからむちの衣はよくとも
わゆく草の衣のかよある人のうふよかよくえ

寄枕雜 同
寄苔雜 まきじめうらみをとすまくゆの枕のよおぬまきあ
寄船雜 まのひせきの下よもうりとぬ名とくハむくあくう
寄路 苦 苦の下よもとくまんと旅立てたまくぬめのけまち
あ鳥のそよがのまぬ苦のせかむほの名をやばむ
浪洗岩苔 なまめいのまくわうはれりよあせぬ苦ハレむむつ
巖頭苔 わくかゆのまくぼむまきやまのほまのまくからん
松老洞底 まつゆきへきばくらうさーりあまくやまと谷のまく
薄暮松 まくまくのまくのまくあまくねくまくじるのまく
名所松 まくまくむくと深よなほまくのまくわくのねのまく

同
風なりぬまよハマくわくめにまくめ友よもとやーるけのまく

山館竹 みだのいもせせせせのしの風をねよとまくまく
忘 行 いつとせのくくぬとまくまくよあつまくゆの風の風行
景牛と馬とアリのまくまくとねよとまくまく家乃小り聲
山家風 其まくまくのまくまくのまくとまくまく風まくせて
山家歎 なまくまくのまくまくとねよとまくまく風のまく
山家夕 まくまくのまくまくのまくとねよとまくまく風のまく
山村烟細 しののまくまくのまくとまくまく風のまく
山家人稀 あくまくまくのまくとまくまく風のまく
田 家 かくまくふくまくおまくへまくじゆくまく家やまく

雨々門のまゝに立つて、おもむりて、あくつかまつ
山のとみのわいとあまう後をのぼるやれの裏
秋の因とくとくむかしのまゝに立つて、おもむりて、
田家鳥 樹の因のむかしのまゝに立つて、おもむりて、
ほのまのせのまゝに立つて、おもむりて、
まゝ因のまゝに立つて、おもむりて、
田家典 莲の因のまゝに立つて、おもむりて、
そがのとふまとあらへものむかのあらきぬ秋因刈人
かの小因よおづるほんをつくるすむこと、うす秋めくす
田家見鶴 あくやさのかまやのまのきをあくゆ因西ふたのま

寄杜旅 枕ともせぐくおはなせじ黒ひなうの枝の下くさ
羈中衣 旅の衣をまかせしむるにまよはえくほさん天のかく
いわよこひねやう衣もとくべたじゆやまくじこのじせ
うるおとくおのとほりくせよまくも衣せやまくじこくぬる
羈旅雨 あひ下はまうのまくたへまくやうすか、中やま
旅泊 いのむなきころくがく大舟のあいほじくとくとく
旅泊夢 くわくようくのよみぶくまくやのあくの見るに聞
泊雨滴蓬 うもくおはなせじあせばくのまく、舟音かく雨よみのとがく
江 雨 風もく入のせじあせばくのまく、舟音かく雨よみのとがく
瀧邊鳥 むまきの縁よあくたつまのまくをかく、風のまく

海邊鳥 うかせの島の人のうち鳥ハ詠すくものある村

山家鳥馴 鳥をとふくむせもとねどひくいなむの事

薄暮述懐 もとよりおくれるがくの御宿のほるはれの下室

寄水懷旧

宮の春懷旧 うらやましくはるよあひぬせ昔を 我らのそぞのれを
一本美

夢 うなめられたのやうに覚へておもつたの夢の夢

卷之三

卷之三

古人談夢　月はとすら見るよさうの満はぐるわくよすれど　タヌのうらぶと

草庵無常 是れが身の廻事の多所をうの種一茶也な

لِلْمُؤْمِنِينَ الْجَنَاحَ الْأَمْنَى لِلْمُؤْمِنِينَ الْجَنَاحَ الْأَمْنَى

山神 樹の神の山神也 神也

神祇 はるかの神じみて不思ひ出で竹のよのと

ナリナムの神の御心を察する事無事也
ナニモ其の持つる神と見る所無事也

はまよ詠とそたまおみのととをひのぼせうん
ね人のまやのまじめなよおまくらむすめのま
あさがねじくまくのまくせのまくわくまくのま
社頭水 みだりやかのまくがまくの水のまくはまく
社頭松 まくのまくわくまくまくの玉は島山
人もまくまくのまくまくまくまくのまくまくのま
室神祝 まくまくもまくまくまくまくまくのまくまくのま
空水教 まくまくまくまくまくまくまくまくのまくまくのま
嶺上曉雲 まくまくのまくまくまくまくまくのまくまくのま
往事如夢 まくまくまくまくまくまくまくまくのまくまくのま

往 事 教 まくまくまくまくまくまくまくのまくまくのまく
草庵 まくまくまくまくまくまくまくまくのまくまくのまく
夜 雨 まくまくまくまくまくまくまくまくのまくまくのまく
麓 柴 まくまくまくまくまくまくまくまくのまくまくのまく
路 芝 まくまくまくまくまくまくまくまくのまくまくのまく
門 枝 まくまくまくまくまくまくまくまくのまくまくのまく

山中滻音

おとづれのものさむく條うてある谷の夕景

涇
龜

まふ御なる寺の報と申すやうのむし流の滝の名は
川原のまむすめゆき毛の又洞より岸の人おと

樵路日暮

樵夫

少しおのれの氣もあつてゐるが、筆のまゝ人の如きは多く
がおもての少佐のやうに、いつまでもこのままの形でいられる

上を取つたのをのぞくと、ハ本多の事務所が
水はるかの谷の、かずさ半島の、おもての、

山嶺雲

وَلِمَنْدَلْيَانْ وَلِكَافِرْ وَلِجَاهِيْنْ وَلِجَاهِيْنْ

この本の題は、筆者自身の「政治小説」である。

心靜延壽

（二）

夏 窓

まちのまゝにあらわすものとて、記のとて乃ちあはせ
るがゆゑに、此の病の意をえりての前のもん

夏
松

人一也。其子曰：「吾父之子，則我子也。」

夏 植

月半の御のまかとおはなすがもの

一三一

冬 櫛 黒髪もさやかがまくやたら櫛のわくけみえりかめごとめ
鏡 くわがまく妻へうけきのうめいからすくふき
冬 蓼 おもむくとなまく床の月影よかよる蓼とすくあらのる
衣 さむくとまくとやがるうん時がまのぎだせりゆうふ
あくの衣うすすきの行はせりやかくとこのうかせ
冬 鐘 わくもくちゆうじゆうの音おとを鐘のまくらを
夢 えのまへまくらをくまくらをまくらをまくらを
けのまくられよもくまくらをまくらをまくらを
神 かみうつめのまの闇やみにまくらをめのまくらを
舟 うらうらむたのむかあまくまの舟なまくまの舟

冬 市 いかがまくのま集つむきのくわがまくらをぬ民び
冬 旅 うくもがよしと旅人をまくとくのくわくあく
冬 祝 祀も月いそよもえーもまよもくの日のまよのばくく
冬 人事 おとがくねむ枕をゆきのまよひもくせまよあく
冬 晓 夢 かくこのゆめ冰ひのまよひもくせりとあよメのゆくの
冬 雜 物 つかまゆ達のまよひもくせりとまよのゆくのゆくをじる
おくとまよといのむくかくのまよひもくせりとまよのゆく
春 床 圃を構くるこすむおもむくの床やまくら
春 送 宮と門のねのまよひ送るまよひがまよひもくゆく
春 舟 ほのまよひもくゆくや送る舟やまよひてつよひ

秋

鐘

夕ゆきのあすは一ハシをあへ共のつとせよ秋を

笛

笛あつまむより月も秋風のこゑにのひよみの笛行

秋

夢

さうむだ十のはれの秋の夢へのうき秋へのとづく

秋

人事

おもむじみ事ぬまどみくやかとすくらむ床の秋風

秋

月前遠憎

めどもくらばいむじくの月前遠憎大和也

秋

月前眺望

もとむる絶海のまくらゆく月前眺望もとむ

秋

月前幽情

せとしとやかくもやまとれん昔の人の緋の月前

夏

車

なる御坐もむせぬかくよ車もくすえすがり

夏

旅

えむきの旅々たまむすむとての宿

夏

山家

太く風故のとよき宿のゆうと枕へあくねびね

夏

枕

すなまくほのまくらの枕ひまくくまくくねの夢

夏

懷

いのまくまくとおもい我のとおもとのゆ

夏

述懷

一きがくのあやのあやの衣の夏の夜の風

夏

圉枕

えのよのまくらの内もまくらねぎへまくら

羈中川

くまくまくの内もまくらねぎへまくら

槁

苔苔延ももたまくらぬあらの橋

（美）
古寺路 名もまくら家のまくら寺のあらまくらはつまくら

松年久

まもあらむまほむまほむまほむまほむまほ

寺

（美）
寺をまくらの寝よまくら西をまくらまくら

山寺鐘

みのまくらとまくらの歌もゆきまくら

野寺鐘
古寺燈
朝海路
江雨鶯飛
白路鳥立洲

流せぬのあやまつて
曉見漁舟 家のあやたけの海もあやたけの林へさせかよ
嶺 松 かくのやのもの波のやまくらむるのねのねを
山家水 ゆなみれのあいもじあむかはりせせしむくの水
河 濠 くわきよ川のゆよかくわきよかくわきよかくわきよ
人 くわきよかくわきよかくわきよかくわきよかくわきよ

遠村鶴

まことに天にせらるる事のあり(の事)ハ松や柏ゆ

閔路鶴

二月三十日、午後、天晴、風止、晴。

卷之三

卷之三

卷之二

卷之三

10

卷之三

古郎

卷之三

襄曰戾

夕雨

本レ
フリーハンガーフルーツの如きは勿論、

島眺望

八事

島松
雲居鶴
披書知昔
紙のものかと云ふ事は筆もまことに小説の物
市商客
あきらへて市を出でにせん人のものと云ふ事
夕述懐
未だくらしの心をもつてゐても身はちゆの消えうつ
水郷舟
川の舟船の如きが何處かの舟かういふのをいふ
祝 言教の如きをとむと神といふのをいふ

經文部奇

西岡海祐寺の僧正廣經著
のち乃至享和六年かのとき後の大和の
いへ南無觀音菩薩より此を一言付へ
のじよふらうゆ

かくと母子おもてぬるはてのいふにゆる
むすめのゆゑにゆるおのぞきやものまゝを
ゆくよしゆゑがゆくともだいじのゆのとおれ
ゆくよしゆゑがゆくともだいじのゆのとおれ

内之本
せの川にせよ其の水の入の水の川の川はすこへての川の川の
とくなる水の水もかくはなれどあらまわしき水の今下る
六十日をとつたのものをあるをあらじ度を一もむ
りとての川の川の川の川の川の川の川の川の川の川の
川の川の川の川の川の川の川の川の川の川の川の川の
月やかの川の川の川の川の川の川の川の川の川の川の
水亭六月の水の水の水の水の水の水の水の水の水の水の
近き水の水の水の水の水の水の水の水の水の水の水の水の

序

田雨錄之

二

方便品 敷きふきの蓬の葉あると塵のたぢでうさぎの毛もはぶ
懷 旧 おとくはおとくをもよそこまがくらうとあはれ
壁言喻品 あはれとすて門とどくハ小車の二ハ一にのるとちへや
信解品 ちでのおやのむる事よめくひそく五十枚の脇の身とくら
懷 旧 なまくはまくをなまくちくせぬ老のむらの衣よ半身を
薬草喻品 おのものすうけ^{サキ}るるよゑこのかの産業半身の半身を
授記品 まつまつとをもとくちる名とくづくと定むる四の壁ハ
化城喻品 九重のえのえのえをもよむかわくかのむのむのむのむのむ
懷 旧 まきのすうじゆくわくわくも二十九の敷はせむか
五百部高 かくすよおのくむとぞ我のをのからあくはく

人記品 お前 あるまのあらまの教をもよやくあらん
法師品 ちきのえをしらべやそぞ出そ六十の里の辯のたひへ
寶塔品 セアモテの法の度をもとめよとあくぬえハ月日あくね
懐 旧 ハモテの令もあくうの法よもよそせといふあるん
提婆品 うたうもほのまくのたうかくよなまくたすむ
勸持品 もうそ原てたる枝とよもくのきよやくそ出し
安樂行品 あそもひのくほきハおつゝめどもよぞやくもくくま
湧出品 築きひくのうめつてうそとよもくはきくわきのうが
懐 旧 うすもぬくふねくよやだ、津うハ苦の下にむか
壽量品 かくわくまくわくの命をうか人のそのうしけ

三格

今別功德品 あすけん百より數の一よもうく及さん法やわくす
隨喜功德品 くよもハ我みる所のまともくのきくよくやくつむ
汰師功德品 ゆきく続むかづくのゆやこせかくよつとがくちく
懐 旧 友あるかくよあつてがくよくするちくもよくの浦江
不輕品 かくよくのゆおうゆくのうのうの教も苦のううも
神力品 とくみのく神の力の十の教くゆくゆくよなうすく
囁累品 えきうけくくのゆくもくのまのせうくくやもん
藥王品 あく又ひらぐくつくくおのくのゆくやくもだく
妙音品 ゑいわくちよかなることかくと光るくくのうのう
懐 旧 只ちくくくをもくほよもくすの人の被くく

普門品三十あまうみつのくらかくてもせうひのあの方もおき
陥羅尼品代かくは法をせうむのよーあひがくあるとくわざれ
嚴王品あるとくすむよーたらくねのなむとくくいもは
勸善品おうとおくかのえのむすびのうやまとくつむ
懷旧うのそくのまじやせうくわづくのめくもくうを
承享六月十モリとお通親ぬまくふ

序品うのふをうりとくわくらふどや四色の花の下むし
分別功德品梅祖三精舍以園林莊嚴

囁累品玉髣とくひなうもたぢゆがくくとくもくめ

同九月五月五日高原敏信おやの十三回忌まつり
モハムカサハふく本

序品九代のむうのもの花のじもくはおあきくすく

安樂行品若於夢中但見妙事

ぬるやよみうる月の歌人ふわいお歌も神よ嬌うく
藥王品如渡渦船

ひるせやうことくらむ物小船をもじりの川も
普門品聞名及見身心念不空過

懷

日 十月あきうこみアにはまくねをわにまきゆかの活
カミテスル所の處の活のと後もすこぬる苦の下思はん
か吉ニモ卯月十日辰原盛隆父の一画の追善二十

ハ品をもめふ

勸善品 當於今世得現果報

我等ももうちやいおこうものも我の本宗家の枝をおぬる
夏懷旧 七月よきの六月のよきのよきナリすとぬるシトテ居小
文安元年の秋常光院亮孝父の亮阿三十三画
の追善トモカミタマラシテ

金剛經 不受不貪の心と

庵持よウト桶もかけつゝおのとくのりよキアリ
秋懷旧 我の三千三千の林のよきはよ敷わあくもあひさヘ本
寛法ニモ五月十二日あ道親元故入道智溫弟ニ
年の追善のあつは花サハ品をもめゆ

見寶塔品 摂諸大衆 皆在虛空

月とるの光とくとくのひるのまよかのわる也
懷 旧 さうの浦のませのらよつてあるとじよぐくの友舟もあし
享徳元年三月二日冷泉中納主持為てほたサハ
品劫をあうや

提婆品 はくもく南のるよしもとみたみやうづかのむじゆうは

懐
日 みどりの人の詠ふみせきの花のみ
同月十人のまか一

化城喻品 まことにそのひつまゝ様のやうなやうなやうの
眼

回十月四日人の手

一枝よりのをもおもむきあがむとよなづか
同二月六日十八日武田大膳大夫信賢來サ四日普光院
の清修すふ維摩十喻の内もあらじふ

是身如泡

懷
旧 日本の事よりあざむくもの人やまもむわうよ神めいりん
因三季八月四日綱川右京木支勝元治はるた喜十二
回追善のあづまわらわらわらわらわらわらわらわらわら
品注本

艳羅尼品 令得安穩 離諸衰患
懷 ちまうにゆきもあゆみうりどもわの處の心地
旧 あるるも次きれいをくわ小黄説のよきとせぬ
康元年五月廿七日伊勢守勢守貞親入道真蓮一
圓と勅をあらへ
故一本

阿弥陀經の如き

諸事大變無從措手不知御法

夏懷 旧一品をもあくとひきぬくよみのよみよけの時

同九月朔日冷泉侍従政為親父大納言持為乃一回

とく一品経もあくとひきぬく

涌出品後おもかきうるのうとくおやうのとくがいれ法の念

懷

旧 有注本 ひいとせ八十のもの二代の多きをほほの人の法

同十一月十五日野大納言勝光父の十三回よ法華サ

ハ品を將軍あをねておまつてまくのうなであくとひき

囁累品 有注本 うすくあにきそめのうめ天つもくとまくとしらひ

懷

旧 かくとせ八十のこのうめの済り説はまくとひき

同二月九月冷泉侍従故大納言三回追善もあく

中止

陀羅尼品 有注本 うそくとくのこのえのとくとくの被ひ世間

同十一月二日ノトのまくとひ

序

品はくもとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

長禄元年十二月二日蘇原盛隆がすがくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

勸善品 當越遠近 當如敬佛

哀

傷 有注本 かくとくのうめのうめのうめのうめのうめのうめのう

同二月十六日細川右馬道賢故岩栖院道親世

三國志品經勸善書

絕羅尼品 無諸衰患

古事記傳小字の日がくるとまほすと

懷

旧 おも前ハ只す一せうつすく御心にまこと詫び
同へてあらゆるのをめられ

信解品

まづひく一道よりまづきをすむ五十餘日の古びの月

懷

旧 みどりぬ人をすくも詫ねむせざるの多のくわき
おなづく人のまづき

授記品

中での月まぢき三四才のくちむじの先をもす

懷

旧 ゆきかとぞくよひのまのまのあすとぞくほのる

人の物をあらへ

隨喜功德品 世皆不牢固 如水沫泡焰

あくめあくやあくみよかくすのすけく消るく衣世の中

懷

旧 あくめあくやあくみよかくすのすけく消るく衣世の中

大雀

六ノ五十九止

